

海軍

明暗の戦場を馳せ巡り

京都府 矢野 美三雄

一 生い立ち

兎追いしかの山 子鮒釣りしかの川

夢は今もめぐりて 忘れがたき故郷

誠にのんびりした故郷、牧歌的な環境の中に、私は大正五（一九一六）年九月二十日、呱呱こゝこの声をあげた。山に囲まれた戸数約五十、隣村約七十で設けられた分校へ、三年間約一キロの道を通った。一、二、三年の復々式学級で、小学校長満期の老先生が、三年は書き方、二年は読み方、一年

は綴り方であった。

それでも体操や唱歌は合同で、歌も日露戦争の従軍歌「父上母上いざさらば、私は戦いに参ります」等愛国心を賛える国粹主義の一边倒で、今思えばよくもまあ徹底的な忠君愛国の教育であったとなつかしく頭が下がる。

舞鶴軍港の町とはいえ家より海までは三キロもあり、裏山へ登り、小浜へ行く汽車を眺めながら自分の体験を友に自慢したものである。

二 就職より徴兵検査まで

明治三十四（一九〇一）年に名提督・東郷平八郎元帥の慧眼により、当地舞鶴に裏日本の海の鎮めとして第四鎮守府が設置された。

世界の平和が保たれた時は直ぐ軍縮が叫ばれ、大正十二年、軍都舞鶴もその大波を受けて不況が襲ってきて、失業者も増えるなど暗い世相となり、米騒動が富山県魚津で起こり、それが舞鶴までも押し寄せて来た。母が百姓で作った野菜を町へ振り売りに行き、不景気で売れ行きが悪いところぼしていたことも思い出す。七つや八つで不景氣がくると聞いても分ならず、どんなものがくるのかなと不思議に思ったものである。

小学校も四年からは約三キロ先の本校へ合流して、海軍士官や技師の子弟子女と肩を並べたが、二年間程はどうしても追いつけず、環境の優劣が学力の進歩にこたえたようだ。しかし毎日の長距離通学で遠足は得意であった。小学校の成績も余り芳しくなかったが、父の経済的支援や兄の社会を見る眼の理解で、当時では高等普通教育といわれていた旧制中学校へ昭和五（一九三〇）年に入學させてもらった。

昭和七年に日本が傀儡帝国満州を承認し、清国

の末帝宣統帝（溥儀）を執政となし、日本の皇祖を祀り、日本の属領化と満州国が東亜共栄圏の基をなしたのである。

中学入学頃はまたまた不況であった。日本も活路を満蒙に求め、当地も軍備の充実に応じ満州守備の陸軍精銳部隊が舞鶴軍港より渡満した。

何と言っても舞鶴は海軍様である。昭和十年、中学卒業と同時に安定株の舞鶴海軍工廠（解説）に就職した。

私は昭和十一年徴兵検査で、幸いにも学校教練も合格しているので、あわよくば軍国の花形の甲幹に合格し青年将校を夢に抱いていたが、いかにせん体重不足で「丙種合格」第二国民兵役で残念であった。

三 従軍の決意

満州事変より支那事変（後の日中戦争）に進み、不拡大方針と言いつつも戦火はさらに広がり収拾もつかぬ泥沼戦争となった。

私は地域で青年団活動をしていたため、工廠内にも舞廠青年団が結成され、私の会計部は支部長が上司の主計少佐で私も役員であった。

戦局進んだ昭和十七年一月初めに、上司より「君、南方の特設海軍経理部の要員に行かぬか。軍属とはいえ拳銃も貸与され、年一回飛行機で内地出張もある」と。

事重大になると誰でも迷うが、私は去就を街頭の易者にかけた。易の卦は「蛟竜地に潜み出でず」と出た。友の多くは中国大陸で銃を執り勇ましく戦死しているのに、我が家は三人の男子、一人も従軍していないではないか、世間体もあるから私の独断で「従軍します」と答えた。家に帰り話をすると、さすがに父は男、頑張れの一言で、母は悲しさの余り寝付いた。

四 故郷を後に

昭和十七年二月十日、工廠より外地派遣は開戦後日も浅く前例がなかったが、出発に当たって会

計部長主計大佐の案内で工廠少将閣下に申告に参上、工廠の名譽を汚すことなく粉骨碎身君国に報ぜよと訓示を受けた。

昭和十七年二月十一日、紀元節の佳き日、郷党の肉親、親戚、知己に励まされ、軍属従軍であるが郷土の氏神様に詣で万歳してもらった。

甥が昭和軍刀（当時としては大金七十五円の父の贈物）を背負い駅まで送ってくれた。歓呼の声で郷里「新舞鶴駅」を発つ。同行の友が京都に親戚があるのでそこへお別れに寄るとのこと、厚かましくも訪れ御馳走になった。

当時としては軍優先のこと故、旅費もたつぷりで、山陽線を夜行で突っ走り、十二日に集結地点に到着した。舞鶴と違い呉は大都市で海軍の大基地、軍港内を海軍専用の汽車が走っており、尋ね尋ね宿舎海光会へ入った。

五 特設海軍経理部

二月十二日、私は満年齢二十六歳で、今から言

えば六十年前、元気でやる気もいっぱいであった。旅の疲れもなんのその、指示された通り第百二海軍経理部設立事務所の呉海軍軍需部へ出頭した。そして経理部の庶務主任に申告した。

特設経理部は百一経がシンガポール、百二経はスラバヤ、百三経はマニラが本部で百二経は支部がボルネオ島のバリックパンとセレベス島のマカッサルにあった。希望で私は油の都バリックパンに配属された。これが運命の明暗とは神ならぬ身の知るよしもがなであった。百二経は人事や物品所管は呉鎮守府で、所属の命令や区処は第二南遣艦隊司令長官より受けるのであった。

私は海軍工廠よりの転属者であるため経理部の業務推進の中枢であると高く評価されたので海軍諸例則（解説）会計法規の勉強もした。

海軍は軍人が優位であるが、軍属も高等文官、判任文官、雇員、傭人、工員、鉦員と大別され、また商社よりの嘱託者も奏任、判任、雇員待遇とあった。私は工廠の工員より経理部の雇員に身分

変更の際、工員日給二十八日分が月給となり、戦時増俸も本給の十五割支給された。これを工廠の工員に比べると工員の最上級工長（海軍部内限判任官待遇）と同額であった。海軍経理部の任務は要は兵站である。

軍が攻撃占領し軍政を行い、治安が回復するまで経理部が日本銀行代理業務や南方開発金庫券の保管や軍用郵便所資金等の交付もしていた。

本省経理局より経理部が経費の分割を受け、艦船部隊の予算整理、給与支払、軍需物資・被服・食糧の調達や代金支払、恤兵品じゅへいひんや戦時特別給与品の取り扱い、酒保物品から敵産押収品の整理、海軍徴備船舶に対して船用金の立替払い、さらに艦船部隊の会計経理の指導監督等々大変多岐多様で、戦地の経済や金融状態も海軍民政部と協力し、その調査研究もした。

六 航程千里

二月二十五日、出港との内示を受けたので、早

速公衆電話で郷里市役所の兄にそれとなく知らそうとしたが、通信管制で不能となった。それで警察まで知らせ、さらに市役所へと悪知恵(?)を働かせて、所轄警察まではつなごうとしたが警察より市役所へつなごうの用に用件を言えとのこと。防諜やかましいその頃のこと、ひっかかっては申し訳なしと断念した。

私の生涯で幾多のミスやトラブルがあったが刑法軍機保護法に抵触しなくてよかった。

二月二十四日、呉軍港陸岸係留の海軍徴備船舶「東京丸」(六四七一トン)に乗船したが、その前日は全員で酒保物品のビール箱の積み込みの使役で、背広姿での慣れぬ作業であった。

どうも作業後胸が痛むので第一〇二病院長の軍医中佐の診察を受けたが「何か胸を圧迫しなかったか」と尋ねられたので詳細を申し述べたが「それだ」と言われ安心した。

二月二十五日、一応呉軍港を出帆したが、翌朝目が覚めてもまだ軍港内であった。防諜上軍港内

を巡回していたと後日耳にした。

便乗者はいずれも蘭領へ行く経理部、軍需部、燃料廠、病院等の数百人であった。その中にも病院の従軍看護婦の一人は男ばかりの殺伐さに和やかさを与えてくれて一抹の楽しさもあった。

私の身分は雇員で兵並みで、高い仮設階段を降りた船底の雑居の居住区で、暑さも南下すると共に増しとても苦しかった。蒸し風呂とはこのことか。海軍の階級は厳しく準士官以上は船橋の風通しの良い所で扇風機がぶんぶん回っていた。海軍の判任官や下士官は同じ船倉でも少し広く、いくらか良いようであった。とても暑くて安眠できぬから上甲板へ毛布を持って上がり、仕事もないのでついビールを暑気払いに(充分な給与でお金もあるから)たらふく飲んだ。当時は冷蔵庫も充分でなく、しかも氷の冷蔵庫であった。毎日食事は皮はぎの煮付けで、余り運動しないけれどもたんのうする程食べた。

船の武装はいかに勝ち戦とはいえ軍船の航海で

あるが、退役の海軍大佐が指揮官兼分隊長で、兵曹長の分隊長、下士官、兵十人程の警乗員で木製の擬装大砲が一門据えてあるのみで心細い極みで、これでは日露戦争の「常陸丸」以下である。軍歌に「ああ堂々の輸送船云々」とあったが、私の便乗船はたった一隻で、護衛の駆逐艦も飛行機の空中警戒もなく、豊後水道を真っ直に南下した。

私は海軍工廠に就職し、海辺近くで成人したとはいえ、船に乗ったのは湾内定期船と、小学六年の頃「天の橋立」へ海軍の運搬船で行ったこと、および中学卒業の年、満州旅行に日本海を横断した二日の航海のみで経験に乏しいものであった。

当時は日本海軍優勢の昭和十七年三月頃である。一望千里の大海原で鷗の群れや木片を浮きに渡海する燕の忍耐力、体力、知恵に感心したりの航海であった。

途中行き交う輸送船も「日の丸」を高々と掲げ、互いに航路安全を祈り合い、同じ大和民族な

ればこそと親密と力強さを一入感ひとしおじた。されど戦時下の航海であるため無防備とはいえ、警乗員の精いっぱい対空対潜でまあまあ安心であった。先行の船が捨てたビール瓶の浮沈を、敵の潜水艦の潜望鏡と誤認し、一騒ぎして肝を冷したこともあった。三月の初め、だんだん暑さが加わって来たので台湾沖で防暑服に着替えた。

七 初上陸

昭和十七年三月四日、ミンダナオ島ダバオへ寄港した。私ら下級の軍属は、陸地を眼前に見ても序列階級別があり、上陸にはなかなか順番が回ってこなかった。士官、高等文官、判任文官とつづきやっと三日目位で上陸が許されたが、同島は米国の領土で、日本海軍が躍起になって攻撃占領した所である。戦塵までもうであった。波止場では陸戦隊が執銃で警戒していた。聞くところによれば同地の日本居留民は原住民の蜂起にて虐殺されたそうで自警団をつくり自衛していた。

私たちは警備の海軍兵に守られ街の見物に行った。初めて目にし足で踏み締める南洋の地、多雨高温で育った深緑の樹木、底知れぬ濃紺の深海、誠に不思議な島であった。

我が軍が攻撃して破壊した水道の余滴を集め、久しぶりに陸上での水浴は気持ち良かった。

街路樹はアスファルトの道路のアーチをなして自然の涼しさを与えてくれ、果物もマンゴー、バナナ、パイナップル等、生まれて初めて賞味するものもあり、食べ物天国であった。

原住民は嘗てはスペインに征服され、米国になびき、今度は日本に屈服するという悲運であるが、長いものには巻かれよ、か。表面的にはおとなしく見えた。

三月九日、蘭印降伏、十二日、セレベスへ向かう。

八 仮入部より開庁まで

三月十五日「東京丸」はセレベス島マカッサル

に寄港、同地のマカッサル支部要員は下船した。

三月三十日、私らバリックパン支部より果物等の十分な接待を受けた。同日より四月二十四日までマカッサル支部へ仮入部したが、判任文官以下はコンクリートの土間にアンペラを敷き毛布にくるまって就寝した。偉い方は水交社泊まりで大きな違いであった。

巡検はマカッサル支部長主計少佐より厳しく受けたが滞在中の四日間は何ら仕事はなかった。日本軍攻略の際、少し戦災を受けたマカッサル市内を散策、買物、プールでの水泳などすこぶる楽しく、食事も陸上でありおいしかった。

二十五日、輸送船「興安丸」にバリックパン支部要員は乗船、マカッサル支部にお礼の言葉を残し出港した。

細心に用心しての航海で二日かかって二十七日任地に到着、トラックに便乗して宿舎に入る。ところが電気は断線、水道も断水と誠にあわれで、蠟燭で照明をとり、二十八日には看板をかかげて

開庁した。

九 ボルネオ島のことなど

当地は石油王国のメッカともいふべき所で、油タンクの林立している様子は壯觀無比で特設海軍燃料廠が採油精製し、特別根拠地隊が警備し、日本へ供給していた。

昭和十六年十二月八日、だまし討ちにて緒戦で勝ちをしめたとはいえ、持たざる日本は石油資源を南方に求め、その開発で軍艦、飛行機を動かし、当時の言葉を借りれば「ガソリンの一滴は血の一滴」に相当するといふ哀れな貧乏国日本であった。

開戦後一年位は給油艦補給であったが、昭和十七年末には軍艦直接給油という苦しさであった。私は同島で四年余り生活し戦闘した。

ルソンの海賊船で悪名高いフィリピンのすぐ南の大島ボルネオは、「からゆきさん」で有名なジャワより知られておらず未開発地である。そし

てオランダの東洋征服の前進基地で、豊富な石油資源は宝の島、ドル箱であった。しかしオランダも中々内部の開発までは手が延びなかった。

バリックパパンというのはインドネシア語で「板がくつがえる」という意味だが、この入り口の浅い湾に面した土地は南方としては比較的海が荒れるのでこの名称になった。インドネシア民族はイスラム教の信者で、肉類特に豚肉はいやがられて、言葉に出しても顰ひんみく蹙を買った。

船中は勿論、開庁後も配属された通訳から簡単なテキストで現地の言葉の教育を受けた。例えば、人「オラン」、魚「イカン」、飯「ナシ」、男「ラキラキ」、女「プルンプアン」、子供「アナック」、ミスター「トアン」、ミセス「ニョナ」と誠に簡単なようで難しく、飯も魚も駄目、人はオラン、困ったことだと話し合った。熱帯の赤道直下である。男女共に原色のきついサロンという腰巻をしている。水浴のバスタオルにもなり、日除けの帽子代用とは好都合であった。

当地は蛇行する大河マハカムの河口にあった、満々たる水をたたえる悠々たる水域で、どっしりした感じのするところであった。

上流のテンガロンには今だに王候が君臨して、優雅な生活を営み、また天然資源として装飾用、工業用ダイヤモンドが産出する。これは当時日本海軍が渴望していたので警備隊が押収し、飛行機で海軍省経理局へ金細工品と共に送ったことも経理部の任務として二、三回あった。

十 経理部の勤務

日本も、ABC D包囲線で滅亡から防ぐには、蠟螂カマキリの斧とはいえ強大国に刃向かったのである。

戦勝国(?) 横暴で時差も勝手に日本時間に合わせたのである。常夏で赤道直下の当地で、一時間早く夜が明けるのに、かつて日本で実施され一般に悪評を買ったサマータイムであった。朝の「総員起こし」も部隊並で、当直将校、副直将校にならって当直員、副直員が判任官、雇員で割り

当てられ、私は雇員の先任のため判任官並の当直員であった。若い勤務員達はなかなか眼を覚まさず、当直員は最初は苦勞であった。定刻になると副直員は「総員起こし！」の号令で各一、二、三、四寮を巡回連呼し、眠い若者達を起こした。

庁舎と宿舎の間はほんの百メートル程であったが、遙拝、宣誓そして体操後宿舎に帰って朝食、八時半に出勤し、部員の「課業始め！」の号令で仕事に就いた。正午になると一旦宿舎へ戻り昼食、灼熱の熱帯地であるから仮眠休養しなければ体がもたない。それで二時間の午睡後再び三時過ぎに登庁し午前中に続き執務した。大体午後二時間で勤務が終わる。別科として、バレーや野球、軍歌を楽しんだ。

月曜より金曜までは終日、土曜日は午前中で、日曜は全体で外出するなどすこぶるオープンで自由な生活が敵の空襲までは続いた。

昭和十七年四月十二日、開庁してから約半月たちやっと業務になれた頃、侍従武官の御差遣を受

け、恩賜の煙草を下賜され感涙にむせんだ。禁煙主義の私は故郷の兄へ全部送って喜んでもらった。

十一 初空襲

昭和十八年八月十三日深夜、B 24 教機が来襲した。私の生涯の初体験で肝を冷した。当夜副直員は支那事変で敵の襲撃を体験している古強者であったので、敵機の飛行機音と防空砲台より打ち上げる砲声にて一大事と判断「敵襲！ 敵襲！」と連呼して皆の眠りを覚ました。

空襲の恐ろしさを知らぬ新参の軍属達は宿舍の陰より空を見上げ、蛇の足のように開く高射砲陣に見とれていた。戦果はなく被害が若干あったようである。翌朝の課業整列に支部長より「空襲の際は経理部は非戦闘員であるから逸早く防空壕に入り身の安全をはかれ。お鍋の破片のように鋭い味方の砲弾片が降ってくる。味方の弾で戦死は犬死である。注意せよ」と訓示があった。同時に昨

夜の副直員の臨機応変の処置は立派であったと褒められ、この一事がその後の彼の書記任官につながった。

初空襲以後の主な空襲は、九月三十日、B 24 七十二機、十月三日、B 24 教機、十月十日、B 24 百七機、P 38 十一機、B 47 十六機、十四日、B 24 九十八機などであった。昭和十九年に入ると燃料廠を狙って連日連夜の定期便で、私はその様子を詳細に私本戦時日誌として書いていた。それも引揚げの際の持ち物検査で、書類は絶対持ち帰り厳禁で、違反者は戦犯にすると脅かされ、尊いその資料も焼いてしまった。今にして思えば残念であった。

十二 戦闘態勢に入る

昭和二十年五月一日、対戦準備に入り、灘軍司令官よりバリック・パン在任の軍属、一般邦人に対し臨時召集（防衛召集）が発令され、陸軍軍籍を取得した。

経理部は陸軍に召集され、二等兵が海軍主計隊配属という陸海混の身分であった。経理部の男子理事生の中には陸軍の乙幹の軍曹もいたし将校もいても不思議ではなかった。彼は軍曹の衿章をつけ軍刀を掲げ威張っていた。

バリックの部隊は第二警備部隊と称され、事前調査によると主力は海軍兵が約三千九百人、うち千五百人が陸戦隊、残り二千四百人は高射砲航空隊で、タラカンより到着の陸軍一個大隊千五百人、そして千百人の日本人、千人の台湾人であった。

海軍の第二十二特別根拠地隊司令官が最高指揮官で将官は第百二海軍燃料廠長の海軍少将の二人であった。

燃料廠会計部、経理部、軍需部、第二十一糧食生産隊、台湾銀行と、それに純然たる部隊組織の第二十二特別根拠地隊主計科分隊が加わり、先任の燃料廠会計部長（経理部支部長兼務）主計大佐が主計隊長となった。

昭和二十年六月十五日、敵艦現れてから後であるが、私等経理部も主計隊の一部であるから、戦闘となれば当然糧食の炊き出しや第一線への配給という任務についていた。

それでも私は経理部の給与係であったので、重い軍票を苦力に担わせ山中を彷徨した。

十三 敵艦見ゆ

昭和十八年八月十三日の初空襲以来、十九年、二十年と定期便の空襲があり、本務の艦隊経費の整理や給与支払、物品購入なども、朝に一筆書けば昼間には空襲警報発令、すぐさま帳簿を袋に入れて庁舎裏の苦力に二年近くかかって土盛りさせたピラミッド型の防空壕（現実には砂上の楼閣）へ搬入し、事務中断であった。

昭和二十年六月五日早朝、戦爆連合二〇〇機の敵機がバリックパンへ向かうとの情報が入る。遂に運命を決する招かざる客、大機動部隊が銀翼を連ねて襲いかかって来たのである。過去何十回

となく空襲の戦禍を受けている私ら非戦闘員もい

よいよ最後が到来したかと観念した。爆撃を避けつつ庁舎に入った上司主計大尉が「たった今、司令部から通知があったが、第四砲台が敵艦三十数隻を沖に発見した」直ちに「千早二号作戦」が発令されたが、「諸君は主計隊となり戦闘するがまず書類の焼却をする。諸君の武運長久を祈る」と。これは大変なことになった。白色の豪軍艦隊の艦砲射撃は一弾一弾、ずしんずしんと腹にこたえた。恐れてばかりいられない。庁舎の前に長さ三メートルに幅二メートル深さ一メートルの穴を全員で掘った。

赤道直下の午後三時、じっとしていても汗が出て炎天下の労働となれば極熱の太陽の直射で頭がくらくらする。書類の帳簿はすっかり綴じてあるから、ばらして燃やすがなかなか燃えないし大変な難作業であった。

十四 転進

翌日十六日、ほとんど不眠不休の経理部四十人は総員集合し、予め計画のボルネオ島奥地入りである。バリックパバンを基点にマハカム河を上がり、一〇キロ、二〇キロ、四二キロ、七〇キロと集結地を設定し、サマリンドアまでを東海道とし、バリックパバンが京都、桑名、名古屋、沼津、最終地のサマリンドアを東京と呼び、とにかく、五十三次の駅名はなつかしいが苦しい退却の負け戦であった。

米を一斗缶に入れて蟻付けし、奥地へ搬入するのは主計隊の任務であった。戦時中は何でも軍優先で特に海軍はぜいたくであった。貝柱や鱈昆布、大豆さては桃の缶詰等々と、とても内地で見られぬ味覚の陳列であった。それらを山越え川を渡って背負って運んだ。最初はトラックもあつたが機銃掃射や爆撃で大方やられ、大変な難渋であつた。それに猛暑で缶詰が膨張し爆発するといふ自然現象が発生し、勿体ないことであつた。

米も初めは靴下へ入れリュックで大事にしていたが、難行軍でだんだん減り、空腹は増すばかり。設営隊が先々に仮の宿を造ってくれていたが無情にも豪雨で、露営もずぶぬれになることもあったし、機銃掃射を避けて大木の周りをぐるぐる廻り、山蛭に吸われながら水浴もした。木陰ばかり退避しているので冷腹で下痢をしたり強行軍で足がだるく野草を艾代わりとして灸をしたこともあった。

十五 敗戦より引揚げまで

昭和二十年八月半ばになると敵機の機銃掃射や爆撃がどうにもおかしいと思われた。その前にも敵はビラを日本軍の陣地に撒き「日本敗戦、早く白旗を掲げ降伏（解説）せよ、食も衣類も充分ある生命も保障する」と誘惑して来た。

忠勇なる日本軍はデマだ謀略だ信ずるものかとビラを破って捨てた。八月十五日の玉音放送もラジオ不調で聴取できずやっとな十七日に主計隊長が

声涙共に下しつゝ詔書の捧読をした。神州の不敗を信じて散った戦友に思いをはせ誠に断腸の感であった。

マハカム河の收容所にて武装解除され戦犯の追及があり何とも不気味であった。捕虜生活の悲惨さはまず空腹であった。引揚げの時の一帳羅として大事に携行していた、なけなしの衣類もバナナや砂糖のかたまりに変わり、食べられる野草や小動物も皆食べた。

戦犯容疑者約三百人を残し、昭和二十一年五月二十日、ボルネオ、サマリンダからマハカム河を機帆船に乗りバリックパパンにて米軍のリバティ型「ピーターパナム号」上陸船にて、昭和二十一年五月三十一日、名古屋地方引揚援護局へ入った。まず消毒でDDTの粉を頭から真っ白にかぶされ被服も消毒された。六月三日、地域別復員列車に乗り懐かしい故郷へ帰った。

私は今八十六歳、敗戦後五十八年経ったが、蘭軍の横暴で抑留中に死亡の方は気の毒であるが私

は生き永らえ、余命いくばくかは天のみぞ知る。

引揚後戦友会も昭和五十五年より始まり、平成十三（二〇〇一）年に解散したが、生死を共にした先輩、同僚の方々と親しく過去を語った。しかし追々年を重ね、物故者も相継ぎ、それに足腰立たずとの悲報も入り一抹の寂しさを感じる昨今であるが、戦友の御多幸を祈って筆を擱く。

【解説】

舞鶴海軍工廠

明治三十四年十月、鎮守府開庁と同時に造船廠、兵器廠、需品庫が開設された。

明治三十六年十一月、合併し海軍工廠となる。

大正十二年軍縮のため鎮守府が要港部に格下げとなり工廠は工作部となる。

組織は総務、会計、医務、造船、造機、造兵の各部と工員養成があり、主として駆逐艦水雷艇の製造修理、砲煩、水雷、電気、関係諸兵器

の製作である。

従業員は明治三十六年一三〇人、明治三十七年一〇〇〇人、明治三十八年四八〇〇人、大正十二年三〇〇〇人整理。

昭和十一年工廠に復活。

従来の工事、人事の工務規則と工員規則に分割された。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争突入、徴用工員は増大し、戦局の悪化に伴い中学生、女学生、小学校高学年を勤労学徒として増産に務めた。

工員養成機関は昭和十年約一〇〇人、終戦年に数百人、補習科の最終年の昭和十八年は約八〇人。

海軍諸例則

戦前戦中には明治欽定憲法で天皇の主権で統

帥大権があり、どうしても陸主海従であったが、海軍には憲法を基にして海軍の辞引ともいうべき諸例則があった。

第一卷 憲法皇室官制

第二卷 雇員備人

第三卷 海軍区艦船兵器航空

第四卷 徴発

艦隊も開戦時には十五艦隊あり、それをまとめたのが連合艦隊であった。

特設海軍経理部は各艦隊に所属する官庁で、経理部長は艦隊司令長官の幕僚として艦隊主計長を兼務で官庁の長であった。

経理部は憲法、会計法、会計規則、海軍会計規程に基づき会計処理をした。

私は実戦はいうまでもないが神経戦でありスパイ戦であった。

軍の書類も内令提要の赤表紙本で定められ、秘密の順位も軍機、軍極秘、極秘、秘とあった。

降伏

昭和二十年八月十五日、終戦時の海軍勢力は艦船約八〇〇隻、七四万トン、作戦可能二〇〇隻、約五〇万トン、航空機六〇〇〇機、人員二四二万人の多数で、南方方面、ジャワ、ボルネオ、セレベス、モルツカ等で、五万二〇〇〇人は陸軍と協同で作戦戦闘中であつた。

私が現実に目撃した点では、昭和二十年五月月初旬「P」のマークのついた服を着せられ、生き残り五七〇人（最初の戦闘員は二五〇〇人）が集結地サマリンドへ合流、別のキャンプへ収容された。ここにも生きた英霊が存在するのを実感した。

終戦後の悲劇は多いが誠に口惜しかったのは蘭軍の一兵士が日本の海軍の特務少尉（元冠の時の勇士村上水軍河野通有の子孫）を欠礼の廉で自動小銃で腹部を撃ち死亡に至らしめた。余りにも腹立しいことであつた。